ぼくのウルトラかあさん

松平康隆

のびのび人生論 33

ぼくの
ウルトラかあさん

松平康隆

のびのび人生論 33

のびのび人生論 33　**ぼくのウルトラかあさん**

1989年12月　第1刷©

著　者　松平康隆（まつだいら　やすたか）

発行者　田中治夫

編集　堀　　佶

発行所　株式会社 **ポプラ社**

〒160 東京都新宿区須賀町5　振替東京4-149271

電話（営業）03-978-0051（編集）03-357-2216

FAX　03-924-5341

印　刷　須藤印刷株式会社

製　本　石毛製本株式会社

N. D. C. 159／166p／20cm

ISBN4-591-03369-4

はじめに

人間は、いろいろな場面で、そして、いろいろなときに、いろいろな人から、学んだり、おしえられたり、あるいは示唆をうけながら、生きているものです。

それは一言でいえば、いろいろな人の影響をうけてそだち、一人前になり、そして年をとっていくんだ……ということになるでしょう。

あるときは先生であり、あるときは兄弟であり、あるときは友だちであり、あるときは選手から（ぼくの場合は）でもあります。ぼく自身、小さいときから六十歳になろうとする今日まで、それこそ数えきれないめぐり合いの中で、そういう人たちのいろいろな影響をうけてきたということを感じます。

その中で、特に影響をうけてきた何人かの先輩や、友人や、あるいは先生というのはわすれられない方々でもあります。

しかし、いちばん、ぼくに影響をあたえたと思われる人をあげろ、といわれれば、

ぼくは何のちゅうちょもなく、ぼくの母と、ぼくの妻の名をあげるでしょう。

だいたいの人間はそうであろうと思います。とくに、男性の八割以上の人にとって、自分の母親は大きな存在であるにちがいありません。

戦時中、戦死した人たちで、今はのきわに「天皇陛下万歳！」といって死んだ人も中にはいるでしょう。

しかし、ほんとうのことをいうと、「お母さーん」とさけんで死んでいった人がほとんどだということを、ぼくは聞かされています。

ですから、ぼくがとりわけ、とくべつだったとは思いませんが、しかし、目の見えない母と、一人息子のぼくという関係は、ほかの母子の関係よりははるかにいろいろな意味で強烈なものがありました。

それは、母がぼくに、あたえてくれたというよりも、目の見えない母の懸命に生きる姿を見て、自然におそわったものです。そういう意味合いで、とくべつの関係だったというふうにいえると思います。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

マザーコンプレックスという言葉があります。この言葉は、今はどちらかというと、なんでも母親のいいなりになってしまう息子という意味にとられますが、本来はそうではありません。母のすごさ、えらさ、母はたいしたものだなあと心から思える部分がたくさんありました。

それを自然にぼくに見せてくれた幸せを、ぼくは今、かみしめながら書いています。

母とぼくの十七年間。その記録という意味で今、したためさせてもらえる機会を持ったということはたいへん幸せだと思っています。

ぼくのウルトラかあさん

もくじ

はじめに
8 男は〝イエス〟〝ノー〟をはっきりいいなさい
16 母のふるさと、鹿児島で
29 目の見えない母をダマすなんて……
43 負け犬になるな
57 やればできる
78 毎朝の身体検査
84 お山の大将、府立二十二中時代
107 母の仕事は骨ガメ屋さん

119 母がヘレン・ケラーさんと会った日
131 おふくろの味
140 空襲
151 母の特技
162 母が生きていたら……

装丁・挿画――内田玉男
デザイン――堀木一男

ぼくのウルトラかあさん

男は〝イエス〟〝ノー〟をはっきりいいなさい

プラスとマイナスと……

ぼくの母は、母が十六歳のとき目をわずらい、たった一晩で失明してしまいました。今でいうなら、細菌感染か何かでしょう。

十六歳の娘時代までは、目が見えていただけに、うけたショックはたいへん大きかっただろうと思います。

そういう母に生んでもらい、そだててもらったぼくは、生まれたときから、母とのふれあいも人よりおおかったような気がします。まさにスキンシップです。

目が見えないから、さわっていなければ存在感がない。しゃべっていなければ存在感がない。ですから、ぼくの子どものころの思い出の中には、母がぼくをだきかかえるようにして話をしてくれた、という記憶がたくさんのこっています。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1歳の頃のぼく。

その中で、母はよく、
「言葉の語尾をはっきりしなさい。」
ということをいいました。
「行きます」とか、「行きません」。英語でいうなら「イエス」「ノー」をはっきりしなさいということになるでしょう。
本人の意志が肯定なのか、否定なのか。真ん中というのはないんだということをしょっちゅういわれたものです。
「ご飯、食べる？」
「ウーン……。」
ふつうの親なら、「ウーン」と答える子の顔を見れば、返事はしているけれど、ほんとうはあまりおなかがすいてないんだな、とか、すいているんだなとかがわかります。
でも、目の見えない母は、表情を読みとって、
「アッ、この子は口では〝イエス〟といいながら、ほんとうは〝ノー〟なんだ。」

と、いうことが判断できない。言葉で判断をするしかないのです。
ですから、中間的な表現をされると、母にとってはたいへん迷惑で、どうしていいのかわからなくなってしまいます。
そして、そのころ（昭和十年）の日本の社会というのは、女性はしとやかで従順、男性はたくましく力強いことがよしとされていた時代でした。
それだけに、
「お前は男の子だろう。男っていうのはね、自分が何を考えているのかをはっきりいうものなんだよ。」
と、ぼくにいい聞かせたのです。
今、母が生きていて、国会の討論など聞いたら、「何しゃべってるんだろうね」とイライラすることでしょう。
それはけっきょく、言葉の問題だけをいっているのではありません。
「男は出処進退（しゅっしょしんたい）をはっきりしなさい。」

ということにつながるのです。子ども心に出処進退という言葉はむずかしかったのですが、何となくわかるような気がしました。

男は何に組するのか、あるいはしないのか。賛成するのか、しないのか。言葉から、態度、行動につながる問題なのだということをしょっちゅういわれました。

このことは、ぼくにとってはプラス面がおおかったのですが、マイナス面もあたえました。

なぜなら、物をはっきりいうとか、はっきり行動するのは、本来、日本人にはあまりなじまない。日本の社会には、あいまいな部分が大事、みたいな風潮があるからです。

「ノー」と、頭からいってしまうと、とてもきつい印象をあたえてしまいます。そのため、敵にまわさなくてもいい人まで敵にまわしてしまい、気がつかないところできらわれていた、なんてこともありました。

女学校の理事でもあった母（右から二番目）昭和初期の撮影。

しかし、たまたま、ぼくのえらんだ人生は〝バレーボール〟。とくに、バレーボールの監督というのは武人の仕事です。瞬間的に判断し、行動し、命令をくださなければいけません。

そういう場面がしょっちゅうあった監督の生活は、まさに母におしえられ、鍛えられたことがプラスにでた部分でした。

また、ぼくは、バレーボールのテレビの解説を長いことやってきていますが、人から、

「松平さんの解説は、明解でとてもよく、わかりやすい。」

とか、

「白黒をはっきりいう歯ぎれのよさは、聞いていても気持ちがいいですよ。」

「ますます、バレーが好きになりました。」

などと、そんなおほめの言葉をいただくことがありますが、それもプラス面にでていることでしょう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com